瞳子

常磐　誠

連載第一回　私達の今

一

私の父親は私の曾祖父から見て初孫だった。全盲という障害を生まれつき持ってはいたが大層愛されたと父は言う。

その父とタッチの差で遅れて生まれ、初孫になり損ねた父親の従兄弟がいる。障害はなく、実に頭が良い。けど初孫じゃなかったから愛されなかった。……なんてことになればそれはそれでドラマチックかも知れないが、実際曾祖父は分け隔てなく全ての孫を愛していた。

そんな父親と従兄弟はタッチの差で曾孫にあたる私達を産んだ。曾祖父は大層面白がり、また喜んだそうだった。結果が逆転した事も、また面白い。曾祖父が言いそうな事だと私は思う。

離れた場所で竹刀の打ち合う音、気合いの入った子ども達の叫び声が遠く聞こえてくる。

やぁーっ！

メェーン！　――ピシャンッ！

ダンッ、と踏み込まれる床板の音。遠いけれど聞こえてくる音が、やかましいように感じられるようでいて、それでも不快だと思わない。

その部屋でピアノを弾くことに、特別の障害であると思う事はない。

私は曾祖父の初曾孫になり損ねた。

だから曾祖父に愛されなかった。何て事は無い。実際曾祖父は出来る限り平等に曾孫に接しようとしていたと思うから。

結構な頻度――大抵週一とか二とか――でパソコンの無料通話をかけてきていた曾祖父が、流石に小学校の高学年になった頃の私にはうざったらしく思い始めていた訳だし、平等に接しようとしていたことは間違いないと思った。東京に住む私と、九州の曾祖父。この距離を埋める為に使われるパソコンの通話は、実に便利ではあった。

もう、話ができなくなってしまって七年が経ってしまったけれど。

別に後悔はない。――私には。

私が出来る事は、したつもりだ。最期の最期に、雰囲気に呑まれて、というのも多分にあるけど、泣いてあげることだって、少しはしたし、さよならの瞬間が近づくその時にも、話をした。もう、十分だと。その時の私からすればもう十分な量、曾祖父とはやり取りができたのだ。後悔は、ない。……私には。

「……」

九分刈りの猫毛。立派で整った太い眉。大きな瞳を潤ませ、泣くもんか、泣くもんか。そんな言葉が震える唇からこぼれ出そうになりながら、曾祖父の棺を握りしめていたあいつは。

タッチの差で初曾孫になったあいつは、どうだっただろう。

曾祖父と近い場所にいて、一番言葉も、直接の触れ合いも多かったあいつには、後悔はなかっただろうか。

別段親しい訳でも、多く言葉を交わす訳でもない親戚でしかないはずなのに。そんなことを考えながら、私はピアノを弾いていて、丁度弾き終わる頃、また私は目の前のピアノに意識が傾いていく。譜面を見る必要も最早無く。容易く、容易く弾き終える。

パチパチパチ。

母が、拍手する。黒髪で、いつも落ち着くから、とか言って着物を着ているような、少し浮いた人。童顔、幼児体型。

「いっつもお母さんは若く見られるんですから！」

と無い胸を張る、色々と残念な母親だ。

「……」

ピアノの蓋を閉めて、私は母に向き直す。赤みがかった髪を持つ私が結構羨ましいと思う、母の髪を見る。

「柚眞の髪はいつも綺麗ですね。お義母さんの髪と似ていて、お母さんいつも羨ましいなって思います。ピアノも上手だし……」

ピアノの置いてある部屋の隅には、母の着物のなおされている箪笥が置かれている。その整理をしながら、母は私にそんなことを言う。お互いに青い芝生でも見ているんだろうか。そんな風には思えない。何故なら幼い頃の私が、

『お母さんみたいな黒髪が良い！　私の髪を黒く染めてよ』

と駄々をこねて泣き、両親を困らせたその日から、母は決まって私が母の髪を見た時に

今のセリフを言うのだ。
もう私も高校生、染めたければ自分で染められる。実に馬鹿馬鹿しいものだと思う。
ピアノについてもそうだ。
『じゃあなんで、私はコンクールで賞が取れなくなったのかしら？』
口は開けても音は出さない。手と、指を使って私はそう母に聞いた。母の顔に、愛想笑いの皺が見える。嘘がヘタクソで、私は本当にこの顔が嫌いだ。
「それは、周りの皆が上手だから……」
『じゃあさ、中学ん時まで私が取ってた賞は何？　ライバルは結構同じ顔なんだけど』
「そういうのは……きっと時の運だし……」
『もうさ。言ったらいいじゃん。柚眞は下手になったってさ』
手と手がぶつかり合う時の音は意図しなくとも激しくなる。
「お、お母さんピアノのコンクールのことはもう難しくてわからないから……」
『あーでたでた。そうやっていっつも逃げるんだ。もうさ。いい加減にしてくれないかな。そうやってピアノのことをわからないくせに褒めちぎったり、髪のこといっつまでも言ってくるの。何。自慢なの？　ねえ！』
「ごめんなさい。やっぱりこの前のことも気にして……」
『うるさい！』
という言葉を言葉に表す事もできないまま、ピアノの蓋を小突く。小突いたつもりで、結構な音がする。それだけで母は体を震わせ、娘の私にびくびくしてしまう。
背丈の小さな母だ。小学生の時に追い越してしまった。今や二十センチ近く私の方が大きくなってしまったのだ。力に訴えれば、すぐに黙るしか無い母を見て、私は何故か落胆する。
『ごめん』
軽く手話で言う。謝る私も、何で謝っているのかわからない。
「いいえ。いいんですよ。お母さんも、いっつも柚眞のことを傷つけてしまうから……」
軽く泣きそうになっている母の顔を、直視出来ない。わからないくせ、イライラする。
「ダメだよ。柚眞」
背中越しに聞こえてくる、父の声。
「柚眞、どうして謝っているのかわからないまま謝ったって、しょうがないんじゃないかな」
穏やかな物腰で、そして刺し貫くような視線と声。目が見えないはずの父は、一瞬の内に私の腰掛ける椅子の眼前で膝をつき、私に手を差し出した。
「柚眞。お前が謝ってたのはお母さんの言葉から察しがつくよ。でも、お母さんに何を謝

るんだい。言ってごらんよ」
この父親の様子からすると、きっと気配を消して部屋の側で聞き耳をたてていたのだろうとわかった。私の言葉は手話で、目の見えない父親には私が何を言ったのかはわからなかっただろうが、母の狼狽する言葉だけで、きっと十分だっただろう。
きっと、娘は母を追いつめ詰ったのだと結論づけただろう。……それは、間違ってはいないが。
けれども、癪だとも思う。私が謝る理由を見付けられないのを、きっと父は悟っていて、それであえて今の質問を私にぶつけている。
そんな型通りの謝罪に、何の意味がある？
その問いに、私は見事答えられることなどなく、沈黙する以外にないのだ。
「コンクールから、全く変わらない」
父が話してくる。普段閉じられた双眸が開かれていて、その眼差しが私に刺さる。一気に、苦しくなる。全てを見透かすような瞳、鋭く尖り、私の内側を穿つような、隠し事も秘め事も、何もかもを露にする眼が、怖い。眼を背ける。
「今、多分だけど、僕の眼から視線を逸らしたね」
その多分、が外れた事は一度も無い。
「いいかい柚眞。お前は腕前、技の部分では抜きん出ている。だがいつの間にか自分を律する事ができなくなっているんだ。勝手をする、暴れ回る自分の中の自分を、律する事もできないまま、音楽を奏でている。その未熟さが、こっち側にまで伝わってくるようだったよ……」
『……ッ！』
父親の手を力一杯に握る。目の見えない父親に私が言葉を伝える為に覚えさせられた指点字。耳は聞こえても、言葉を話す事だけができない、構音障害の私が、ようやく父に思いを伝えられるようになったその手段を用いて、言えた言葉なんて、
『ピアノのことも！　音楽のことも！　何も知らないくせに言う事だけは一人前か！　素人のくせに！　ふざけるなド素人が！』
振り返るだけでみっともなくて死にたくなる。しかもだ。
「これは先生にも確認を取って、その上で言っている言葉だよ。先生も、同じ意見だってさ」
というおまけ付き。私の師からのお墨付きまでもらえるような見解を父は持っていて、流石にどっぺりとくる。うんざりした心地で、私はピアノを弾いていた。
コンクール用の気が利いた楽曲なんかではない。猫踏んじゃった、だ。それも、がっち

やんがっちゃんと打ち付けるように、乱暴に。反抗期のガキかと我ながら思って、弾き終わった後に、自分一人で勝手に笑っていて、さぞ滑稽だ。ここに鏡がなくて良かった。もしもあったら、本当に死にたくなっていることだろう。

一頻り笑い終わって、本当に馬鹿馬鹿しくなって。だから私はまたピアノの蓋を閉じる。その時に、

「今日も荒れてたね。姉貴」

三つ年下の弟、貫太が話しかけてきた。剣に全く興味を示さなかった私とは違い、貫太は幼稚園に通いだす頃から一生懸命に剣の道を歩んでいる。

『何の用？　別にアンタと話すような要件こっちにはないんだけど』

視線と手話で冷たくあしらう。

「んだよ。別に姉弟なんだからさ。用がなくっても話しかけて良いだろ？　つか、用ばっちりあんだけどさ。姉貴には何の連絡も行ってないの？」

しかめっ面をしながらも、貫太は私に話しかけてくる。携帯電話を差し出しながら。

何の要件だ、そう怪訝に思いながらめんどくさい、という感情を露骨に示しつつ携帯電話を見ると、それは最近中高生に流行っている無料通話やグループでの会話ができるアプリの会話の画面で、

琥太坊（こたぼう）「今年もバッチリ全国決めたよ！　来週にはまたケビンと一緒に来るからよっろしっくね～♪」

と楽しげなメッセージを送りつけている例の初曾孫の文章だった。おまけにニコニコマークのスタンプまでつけてきやがって。ガキか。

読み終わった私は携帯を貫太に押し付けるようにして返しため息をこれまた露骨についた。

「やったね。俺またこの時期が来るの楽しみにしてたんだよね～。今日早速その準備とかしてたんだけどさ。まぁそっちは大変だからちょっと嫌だったんだけど」

兄貴が増えるような感覚があるのだろう。普段こんなに饒舌になることのない貫太が、この時期になると本当にテンション高く喋り続ける。それがまたウザい。

「姉貴も何だかんだ言って、楽しみだろ？　琥太さん達が来るの！　いっつも来る前は嫌っそうな顔してるけどさ。来たらいつも楽しそうだもんな！」

『やかましい』

という言葉と同時に脛に一発蹴りを入れる。

「うわっ！　痛ってぇ！　弁慶の泣き所とか最低なクソ姉貴だな。俺間違った事何一つ言ってねーのにな！」

『私は生憎手が使えないんだ』

そう手話で言いながら今度は股間を狙う。
「怖え！　姉貴クソ怖えぇ！」
走って貫太は逃げていく。窓の外は日暮れ。赤く染まった空が見える。
かぁ。かぁ。かぁ。カラスが飛んでいく。
そう言えば汗ばむ季節にもなったか。そうだ。また、この家が暑苦しく、男臭くなる時期がやってきた。この時期が、やってきた。

二

別に泣いたっていいんじゃねぇの？　という貫太の声が頭に染み付くこともある。そうして、その染みが生み出す音と一緒にピアノと向き合えば、大抵何かが狂いだす。それがわかっていても、不思議とその染み付いた響きが心の中に不協和音を作り出し、そしてそれに左右されずにピアノを弾く事が、どうやら私にはできないようだった。
「困った、なぁ……」
という師匠（せんせい）の声を聞いて、私も困る訳だ。指導者が困ってどうするっていうんですか。
「柚眞、君は譜面にもっと集中するべきだ」
そんな単純な指摘を受け、私は返事をしながらも、
『そんなこと、わかってる』
というそんな思いを、手話や文字盤――五十音に濁点、半濁点、アルファベットが備えられている意思表示用の板だ――を使わなければ人に伝えられない私は、師匠（せんせい）に伝えないまま、頷いている。
私は譜面をあまり演奏しながら見ていない事が多い。何せ何度か弾いてしまえば音は頭に残り、それらが私に教えるのだ。次はここだ、こういう風に運指して、そんな風に弾いていればミスは一切無い。
「ミスが無いのは君の一つの魅力だ。でもね、ミスが無いだけならロボットの方がより良いんだよ。君の演奏は……」
そういう風に続く言葉に私は手話で斬って返す。
『ロボットのなり損ね、ですか？』
その手話を見て、師匠（せんせい）は、
「……いや、それなら、まだ良かったと思うよ」
とだけ言って、黙ってしまった。黙ったまま、次の指示がない。
『じゃあ次、私はどうすれば良いですか？』
と、指示を仰ぐ。
「……。いや、もう止めだ」

師匠が、重たく口を開いた。重たい口、ではない。かつてドイツを始め、世界各国でコンサートを成功させ、指導者としても優れた人。そんな人を父や曾祖父が見つけて口説き、私の師匠になってくれた師匠が、匙を投げた瞬間だった。

『……』

私も、これには流石に絶句せざるを得なかった。

「君は、あれからちっとも変わらないんだ。自分の出す音に振り回され、何もコントロールできていない。君は譜面を正確に、ロボットのように弾いているのかも知れないが、実際はロボットにもなれていないし、まともな大人にもなっちゃいない。そして子どものような楽しさだって微塵も持っていないんだ。何の為に君はピアノを弾いているんだ。君はピアノを弾く事が楽しいのか？」

一気に、堰を切ったように溢れ出す師匠の言葉を聞きながら、私は、

『……』

何も言葉が出てこなかった。

正確じゃない？　私は演奏に際してミスなどしていないはずだ。譜面に描かれた情報の読み損ねや弾き損じ等、ない。

感情がダメなのか？　楽しい？　どういう意味だろう。私はピアノが楽しいと思った事はない。一度もない。

本当に子どものように、楽しそうにピアノを弾く大人のプロを、私は知っているが、私から見れば、何が楽しいのだろう、どうして楽しいのだろうと疑問に思えてならない。

要するにバカみたいに思えてくるのだ。そういう風にピアノを弾く事が偉いのか？　そんな風にピアノを弾くから素晴らしいのか？　そんな表層的事柄しか見れないものなのか？　そういう疑問が私の中にはいつだってあって、そして今の師匠の言葉は、

「うん、そうだよ」

という肯定にも等しかった。言葉が出ないということは、つまりは落胆だ。私はそんなコトに対する師匠の肯定と、私に対して並べようとしているハードルに対して、落胆した。

「……しばらく君はピアノから離れるべきかも、知れないと思ったんだよ。お父様にもそうお話ししている。けど、もし戻れるのなら、君がちゃんと演奏出来る状態になれそうならば、また私も戻ってくるよ」

せんせい、と呼んでも師匠として敬え。父の教えだ。師と敬っているはずの人が目の前で述べた言葉は、一種の敗北宣言とも取れて、一層私の落胆は深まっていった。

師匠が家を出て行って、母がそれを見送った。父は門下生の指導をしていたからそこに同席する事はできなかった。

「……」

母は何も私に言わなかった。言えなかった、なのかも知れない。昨日の今日で、言えばまた私から責められると思ったかもしれない。思わせている私は、何も言わないでいて、それでなお私と目が合った時に微笑もうとする母のその姿に、またイライラを募らせていた。流石に、自分勝手だ。そう思ったが、だからどうしろというのか。ため息だけ小さく吐いた私は、ピアノの部屋、ピアノに触れる事も出来ずにただ、そこにごろんと横になることしか出来なかった。ピアノに触れる、ということすらも、今の私には許されないような気がして、許されないっていうのがどういうことなのか、それは全くわからないままで。

「姉貴！　風邪引くぜ姉貴！」

という貫太の声に起こされるまで、眠りこけてしまっているばかりだ。

琥太の方はといえば、私から見れば順風満帆、という言葉がこれ以上似合う人間はいない。ムカつく程に、だ。

公式の大会においては負け知らず、という奇跡的な成績を残している。いや、全戦全勝、という都合のいい話では流石に無い。

でも、琥太が負けるのは決まって、練習試合だったり、団体戦でチームの勝利が確定している時だったり、後は精々琥太が負けても残りのメンバーが勝ってしまったり。というようなそれ程重要な場面ではない時だけの話で、琥太はいざ、という時には百パーセント白星を手にするという相撲人生を歩んでいる。

テレビであいつが特集された時、当然その無敗伝説は取り沙汰され、インタビュアーから質問された。それに対して、

「稽古をするだけ。本当にそれだけなんですよ」

とにこにこした笑顔で愛想良く答えるあいつの顔を見て、私はチャンネルを速攻で変えてやった。貫太が、

「何すんだよ！　俺見てたのにさ」

と言うのも無視してテレビのリモコンを放り投げ、私はピアノの部屋に向かっていった。行ってやることは決まっていて、乱暴な気持ちで乱暴に音楽を奏でるのだ。

ハードな楽曲を選べば、そういう気持ちに乗せてもそれらしく聴こえるのだから便利だ。だから、そういうのに甘えている、ということも私はわかっている。わかっていて、やっている。世話が無い。

そもそも、ピアノ今私禁じられてんだっけ。そうだったけね。もう知らないわ。知らねぇ。あぁ。どいつもこいつも！

こういう時、家族も、父の門下生も、誰一人顔を出さないし、部屋には近づかない。そりゃそうだ。どいつもこいつも！　なのだから。

どいつもこいつも私をイライラさせるばっかりで。

こうやってピアノにあたるくらいしか、私はストレスを解消する手段を知らないし。がっちゃんがっちゃんズジャンズジャンと鳴り響くピアノの旋律が、私の心を慰めるどころか、余計にかき立てる。もっと叫べ。もっと奏でろ。打ちつけろ。

どこからもそんな明示されて指示は飛んでこない。これは私の脳が。頭の中が勝手に叫んでるだけの夢想。思い込み。

でも、私はまるで私以外の何かに導かれるようにして、そしてその誘いに乗っかるだけ乗っかって、のめり込む。のめり込んで、私は消えていく。いや、溶けていく。

音の中に、私は溶けていくんだ。

――連載第二回『追想劇』へ続く